



人権

ゆかりの地をたずねて

京都市内編

京都人権啓発推進会議



通信使船団図屏風（上）（個人蔵）

鞆浦に入港する船全体が彩色された華麗な船団

洛中洛外図屏風（下）（岐阜県・光明寺蔵）

旗を揚げ喇叭を吹き鳴らしながら方広寺に入る通信使の一団

はじめに

「激動の世紀」と言われた20世紀が終わり、「人権の世紀」と言われる21世紀が到来しました。この言葉には、21世紀を人権が尊重される平和で豊かな社会にしたいという、人々の願望と期待と決意が込められております。

人権尊重を日常生活の習慣として身に付け、人を大切にする「人権の世紀」にふさわしい社会を築いていくために、私たち一人ひとりが人権の大切さについて考えていかなければなりません。

京都人権啓発推進会議では、平成7年度から毎年「人権ゆかりの地をたずねて」を発行してきましたが、この冊子は、京都府内に残る様々な人権にゆかりのある場所をたずねて、そこに生きた人々の歴史などに接していただき、より一層、人権への関心を高めていただこうと作成しているものです。

この冊子は、（財）世界人権問題研究センターや多くの方々のご協力を得て、これまでに60話を紹介してまいりましたが、最終となる今回は、地域版の第3編として、京都市内12カ所の「人権ゆかりの地」をたずねました。

京都府内には、このシリーズでとりあげた「人権ゆかりの地」以外にも、まだまだ多くの「人権ゆかりの地」が残されております。

このシリーズで紹介しましたそれぞれの「人権ゆかりの地」が、皆様の身近にある場所を今一度、人権という視点で見えていただけるきっかけとなり、人権への関心を深めていただくこととなれば幸いです。

平成13年3月

京都人権啓発推進会議

人権

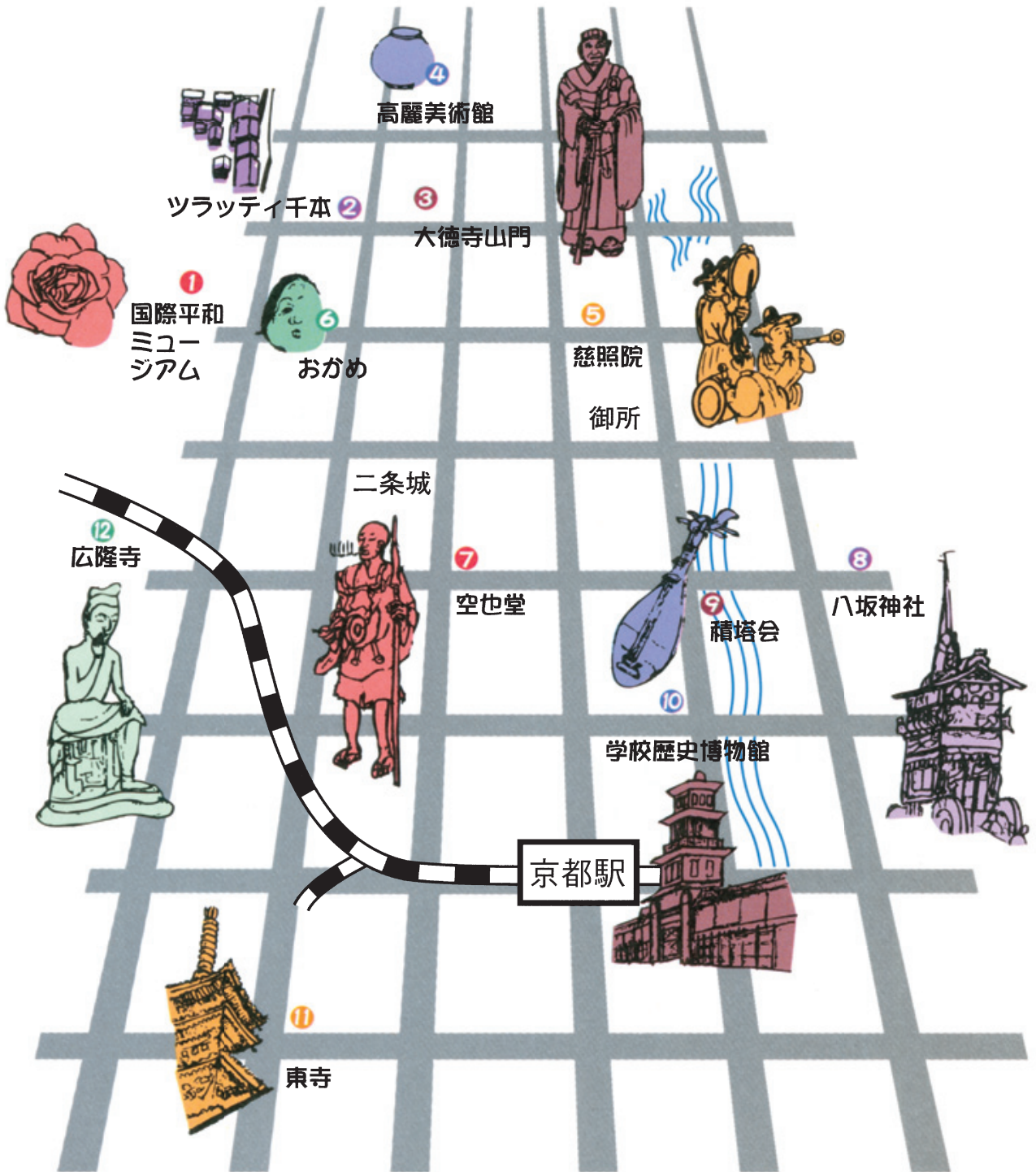
ゆかりの地をたずねて

京都市内編

もくじ

はじめに	1
案内マップ	3
1 立命館大学国際平和ミュージアム	北区 4
2 ツラッティ 千本	北区 6
3 大徳寺山門	北区 8
4 高麗美術館	北区 10
5 相国寺・慈照院と五山僧	上京区 12
6 千本釈迦堂 「おかめ」の像	上京区 14
7 空也堂	中京区 16
8 八坂神社	東山区 18
9 盲人たちの積塔会	下京区 20
10 京都市学校歴史博物館	下京区 22
11 東寺	南区 24
12 広隆寺	右京区 26
編集によせて	28

表紙写真「京都名所大鳥瞰図」(昭和初期・吉田初三郎画 京都府立大学蔵)



案内マップ

1 立命館大学国際平和ミュージアム

北区

立命館大学国際平和ミュージアムは、金閣寺、竜安寺、等持院、堂本印象美術館などに囲まれた京都市北区、きぬかけの道の一部にあります。戦争の加害と被害の実相を見つめることにより、過去の学び、人間の尊厳と国際平和の実現について学びを深める機会がもてればと願って、平成四年（一九九二年）五月に開設されたものです。

「わだつみの像」の置かれた入り口から階段で地階へ。ミュージアムの中は、三つのテーマにそった展示がされています。順路に沿って歩くと、まず「十五年戦争の実態」というコーナー。日本の軍隊制度や軍隊内の生活、戦時下の暮らしと国民総動員の様子、植民地・占領地での日本軍の支配とアジアの人々の抵抗、空襲、沖縄戦、広島・長崎への原爆投下など戦争の加害と被害の実態に迫る資料が豊富に展示されています。「煙突屋ペロー」（アニメ）「戦時下の国民の暮らし」など当時の映像資料、戦時下の町屋を再現したセット、京都原爆投下計画のシミュレーション装置もあります。戦争が国内でも国外でもいかに大規模な人権侵害をもたらすものかということが資料と展示物から伝わってきます。

続く「第二次世界大戦と戦争責任」のコーナーは、極東国際軍事裁判やニュールンベルグ国際軍事裁判、戦後補償・賠償問

題など戦争犯罪と責任に関する展示が。アウシュビッツ博物館やマイダネック博物館から提供された収容所の貴重な資料も展示されています。第二次世界大戦後、ジェノサイド条約や世界人権宣言など国際人権保障が必要となった背景を探ることができます。

「戦争と平和のあゆみ」を映像で示したミニシアターを通り抜けると、「現代における戦争と平和」のコーナー。一方にはベトナム戦争を例に、現代の科学技術が戦争にもたらす影響と一般住民の犠牲、民族自決の戦いの様子が。他方には、第二次世界大戦後の東西両陣営の核軍備競争がもたらした核戦争の脅威と核兵器の廃絶をめざす国連や世界の人々の軍縮努力の様子が、核模擬爆弾や核軍備競争を示す模型、核戦争がおこった場合におこる惨状の映像などによって示されています。三つのコーナーの終わりには、戦没学徒の絵画を展示した「無言館」コーナーが設けられています。

（葉師寺公夫）



立命館大学国際平和ミュージアム

メモ●「立命館大学国際平和ミュージアム」は、西大路通わら天神西（北区平野上柳町）で、市バス「わら天神前」より徒歩5分

2 ツラフツティ千本

北区

京都市北部の千本地域は、中世以来、蓮台野れんたいのとよばれ、村民は社寺、公家、二条城などの「きよめ」役をつとめていました。また、興業にも関与し、その世話役（櫓銭やぐらぜ）の収取も得ていました。しかし、村民の中には町方の女性と結婚したため追放され、女性は、被差別民とされた事件もありました。

維新にさいして、「解放令」にさきがける明治三年（一八七〇年）、村長益井元右衛門もとえもんは、身分解放を願ひ出るなど先覚的な動向をみせていました。益井は、その子息たちと財力をあげて学校の建設や、貧民救済に、また子孫は眼科医・衛生医として地区の医療に努めました。

また、その科学的知識から屠場の近代化を進言、その科学的処理について府の認可を受け、経営にも参加したのでした。そして、旧幕時代の「小法師役」（清掃・植木手入役）勤務を理由に土族編入を要請、明治三十三年（一九〇〇年）、実現をみましたが、その後、部落改善事業の事跡からも消えていきました。その後、村長になったのは、井上靖で教育や医療行政に尽力、みずから村民の要請にこたえて治療行為をし、違反とされますが、村民の支持を得ていました。

米騒動の時期、同情融和大会に参加した南梅吉は、大和同志会の有力者として活躍し、「部落の人豪」として有名になり、

やがて全国水平社の創立に参画、その初代委員長となり、自宅が本部となります。しかし、社内での対立から分派の日本水平社を設立、やがて融和運動の方向をめざしました。

当時の千本は、その周辺の地域を都市計画地区とされ新興住宅地区となっていくますが、千本は不良住宅九十六%、世帯数四百四十三、人口二千六十九人のうち在日朝鮮人が百四十二世帯五百七十三人という混住地区でした。しかも一人当たり二帖程度の畳数で、高地でありながら地区内は水はけが悪い湿地域でした。この地に市立隣保館、幼児保育所ができたのは大正末のことでした。水平社という人間尊重の叫びは、このような社会的背景をもっていたのです。

この状況を一変させたのは、戦後の「オールロマンズ事件」と「同和对策事業特別措置法」でした。市は「事件」後、市営住宅築只第一棟を建設、二十年余りで当初の計画を完成しましたが、四十年余りたった今、建替更新期をむかえています。住民は市と協力しながら「千本ふるさと共生自治運営委員会」をつくり、「共生・永住・自治」をめざして活動しています。「ツラフツティ千本」（築只隣保館資料室）はその象徴で、先覚者の資料等が展示され、年間四千人近い人々が参観にきています。

（秋定 嘉和）



ツラッティ 千本

メモ●「ツラッティ 千本」は、北大路通千本（北区紫野花ノ坊町）で、市バス「千本北大路」下車すぐ

3 大徳寺山門

北区

大徳寺は十四世紀のはじめ、大燈国師（宗峰妙超）によって一宇が建立されたのがその始まりと伝えられ、その後、勅願寺となりましたが、応仁元年（一四六七年）に勃発した応仁の乱などによって、伽藍の多くが失われました。その再建事業が着手されたのは文明五年（一四七三年）のことですが、山門（金毛閣）が連歌師宗長らの奔走によって立柱されたのは、これよりさらに遅れて大永六年（一五二六年）のことでした。しかし、この時の造営は初層だけで、上層は佗茶の大成者といわれる堺の町衆、千利休が私財をなげうって天正十八年（一五九〇年）に完成させ、ここによくやく現在みるような重層構造となったのでした。上層の梁木銘には「檀越泉南利休老居士修造」とありますが、解体修理の際に発見された棟札には、紹安・少庵など千家一族の名が書かれていますから、この山門修造は、千家こそっての大事業であったことがわかります。

このとき利休は、自分の木像をこの上層のなかに安置しました。それは、利休の尽力に感謝した寺側の意向によるものなのか、あるいは利休自身の希望によってそのようなことをしたのかかわかりませんが、このことが天正十九年（一五九一年）になって問題にされるのです。この年二月、利休は突然、豊臣秀吉によって切腹を命じられます。利休は、茶の湯ばかりではなく、秀吉政権

内では政治的にも重要な位置にありました。それで、政治の争いの犠牲にされたのではないか、との意見もありますが、切腹の表向きの理由というのは、一つは利休が茶器に法外な値段をつけて売買した、つまり不正を働いたというものであり、そしていま一つが、雪駄を履き、杖をついた自分の木像を山門の上層に置いたのは不敬不遜であるというものでした。

大徳寺山内には、秀吉がもとの主君織田信長の菩提所として建てた総見院をはじめ多くの塔頭があり、天皇の使いである勅使や秀吉自身もこの山門を通過して山内に入りました。その頭の上に、雪駄を履いた利休の像があるわけで、それが不敬不遜に当たるというわけです。山門に木像を置くことは他にも例のあることでしたが、二月二十五日、この木像は堀川的一条戻り橋で磔にされ、二十八日には京都の聚楽屋敷で切腹した利休の首も、ここに晒されました。木像はその後、備前岡山藩の筆頭家老で茶人でもあった伊木忠澄が、邸内の祖堂に祀っていましたが、明治になってから大徳寺に寄付され、利休が安置したもとの場所で袈裟を掛け、いくぶん微笑みをもったような顔をして、静かにたたずんでいます。

（川嶋将生）



大徳寺山門

メモ●「大徳寺山門」は、北大路通大徳寺北（北区紫野大徳寺町）で、市バス「大徳寺前」下車すぐ

4

高麗美術館

北区

高麗美術館は、北区の上賀茂神社の近く、閑静な住宅街の中にあります。この美術館がなぜこの地につまったのか、それは美術館の生みの親である鄭詔文テョンシヨムさんの自宅がここにあったからなのです。

鄭詔文さんは朝鮮半島生まれ、六歳のころ兄や祖母とともに両親に連れられて日本へ渡ってきました。戦前は西陣の織物工場に住みこみで働きました。戦後、父君は一足先きに帰国されましたがまもなく亡くなり、残された家族はやむなく大阪や京都で仕事をみつけて働くことになりました。在日に対するきびしい差別と偏見のまなざしの中、鄭詔文さんは必死で働きつづけて生活を支えてきました。そして、いつかは統一成った祖国へ帰ることを終生の念願として生きてこられました。

その鄭詔文さんに大きな転機が訪れました。それは京都のある骨董屋の店先でみつけた「李朝白磁りちやうはくじ」との出会いです。祖国の文化がこんなに素晴らしいものか、またこのような素晴らしい文化を生んだ朝鮮民族とはどのような歴史をたどってきたのか。そのような祖国とその文化に対する関心が、日本にある朝鮮文化の遺品の収集と、季刊雑誌『日本のなかの朝鮮文化』の刊行へと結びついたのです。司馬遼太郎、金達寿、上田正昭さんらが中心となって昭和五十六年（一九八一年）の第五〇

号まで、日本の民族、文化、国家の形成に朝鮮半島からの渡来人が果たした役割の大きかったことを誇り、訴え続けました。

昭和六十三年（一九八八年）一〇月、鄭詔文さんの自宅の地に「高麗美術館」が開館しました。仕事の合間をぬって鄭詔文さんが収集した約四千百点の文化財や民族資料は、その資料すべてが日本人がかつて朝鮮半島で安値で買い集めて日本へ持ち込んだものです。中には略奪同様に持ち帰ったものもあります。

鄭詔文さんは、朝鮮の文化の素晴らしさをたたえる日本人はいても、その文化を生んだ朝鮮人を軽蔑したり、その民族の運命に、痛みを感じない人が多すぎることに気付いていました。そして在日韓国・朝鮮人が、みずからの文化の素晴らしさに気付く機会が少ないことも痛切に感じていました。これらの熱い思いが高麗美術館の開館にこぎつけたのです。残念なことに鄭詔文さんは開館後まもなく亡くなりました。けれどもいま、高麗美術館に展示されている古代三国から李朝時代にいたる数々の遺品のひとつひとつが、鄭詔文さんの思いを伝えてくれます。

（仲尾 宏）



鄭 詔文



高麗美術館

メモ●「高麗美術館」は、堀川通竹殿西（北区紫竹上ノ岸町）加茂川中学校前で、市バス「加茂川中学校前」下車すぐ

5

相国寺塔頭・慈照院と五山僧

上京区

江戸時代の日朝交流は朝鮮からの通信使来聘を軸として対等・抗礼の儀式を交わす善隣関係でした。その交流を円滑にする上で大きな役割を果たしたのはいうまでもなく、室町時代から朝鮮国と密接な交易関係で結ばれていた対馬藩でした。

しかし、その対馬藩にあって外交実務になう点で欠かせぬ重要な仕事をした人々がいます。それは「対州修文職」とよばれた京都五山の碩学僧でした。

寛永十二年（一六三五年）幕府はこれからの朝鮮外交をすすめるにあたって対馬藩を監察し、日朝の往復外交書簡を起草することができる碩学僧を、対馬へ二年交替で派遣することにしました。対馬藩が勝手に文書を発行したり、改変することを防ぐ役目でもありました。京都の東福寺、建仁寺、天龍寺、相国寺では、幕府から認められている碩学料を割いて、対馬派遣の僧侶に給付してその任務をまっとうさせました。

漢文を自在に読み書きできるだけでなく、中国・朝鮮の故事にも明るい碩学僧は朝鮮国の信頼をかち得ることができました。また、漢詩文に堪能な彼らは、江戸と対馬間の長い道中を接伴僧として随行することで、通信使の使臣や一行中の文人と詩文の応酬を重ね、友情を深め、文化交流を実り多いものになりました。京都御所の北側にひろがる相国寺境内からやや離れた場所に、

慈照院という塔頭があります。三回にわたって碩学僧を出したこの慈照院には、これらの交流から生まれた往復書簡や詩文が数編残されています。また通信使の画員が描いた絵画も詩文と共に貼りませ、屏風に仕立てられて見る者の興趣を一段と深めてくれます。

なかでも正徳元年（一七一一年）の正使・趙泰億や従事官・李邦彦（南岡）と慈照院の別宗祖縁和尚が交わした書跡の数々は、用いられた朝鮮製の料紙とともにすばらしい交流の遺品といえましょう。

碩学僧たちは対馬では以厩庵とよばれる宿舎で外交事務を管理したため「以厩庵輪書僧」ともよばれました。彼らは、かわった外交記録を『本邦朝鮮往復書』などに筆録して残しています。

二百年にわたって東アジアの平和と安定、友好と文化交流がすすめられた影にはこのような京都の五山僧の傑出した才能と努力があったのです。

（仲尾 宏）



相国寺塔頭・慈照院

メモ●「相国寺塔頭・慈照院」は、烏丸通鞍馬口下ル（上京区相国寺門前町）で、
地下鉄「鞍馬口駅」より徒歩5分、市バス「烏丸中学前」より徒歩2分

6

千本釈迦堂 「おかめ」の像

上京区

機屋・しみ抜きのれんの暖簾が並び小路を曲がると、みたらし団子の古びた旗が風に舞っています。わらべ歌が聞こえてくるような界限を、乳母車をゆったりと押すおばあさんに導かれるようにいくと、檜皮葺ひわだぶきの屋根がみえます。京都市上京区の大報恩寺、釈迦座像を本尊とするこの寺は、安貞元年（一二二七年）の建造で、応仁の乱をまぬがれた京の街に残る最も古い寢殿造りの木造です。この本堂には快慶作の十大弟子像、定慶の銘がある六観音像がまつられています。寺のもうひとつのシンボルは、本堂建築にゆかりがある「おかめさん」です。

「おかめ」は、本堂造営の棟梁・長井飛彈守高次の妻で、夫が柱の寸法を切り誤ったとき、「いっそ斗ますくみ校まをほどこせば」と進言しました。この提言は、短く切ってしまった柱の上に組みものを造って飾るといふアイデアで、現在も内陣・外陣は組入天井になっていて柱は桷組で固定されています。貴重な材木を生かした建築は成功し、同年十二月二十六日に上棟式を迎えることができました。

しかし、寺の由緒を記した縁起の書きものには、「この日を待たず、おかめは黄土に旅立ったのである。」と伝えています。いま寺を訪れる人への案内文には、「この日を待たずして、妻は自ら自刃して果てたのである。女の提言によって棟梁として

の重任を果たし得たということが、世間に漏れ聞こえては…。〈この身はいっそ夫の名声に捧げましょう〉と書かれています。そして、石碑によれば高次は、「亡き妻おかめの名に因んだ福面を扇御幣せんごひにつけて飾り、妻の冥福と大堂の無事完成、永久を祈ったと言われている」とも述べられています。

上棟式の日の御幣におかめの名に因んだ福面が飾られているのも、おかめ伝承によるものです。

本堂の前、東の扉ぎわにある宝篋印塔ほうきゃういんたうの前には大きな「おかめ」の石像が、おかめさん信奉の人たちによって建立されています。

にこやかな笑みをたたえたおかめ像に向かいあって自決の意を問うても、余りにもふくよかな表情が超然と座すばかりです。

夫の高次が上棟式に福面を飾った真意が、「おかめ」への愛情と感謝の気持ちであった、やはりそう考えたいとも思いました。田顔で愛嬌のある女の仮面とされるおかめ、福々しい石の像に、朱色のあじさいが寄りそっていました。

(福田 雅子)



おかめ像

メモ●「千本釈迦堂」は、今出川通上七軒上ル（上京区溝前町）で、市バス「上七軒」より徒歩5分

7 空也堂

中京区

空也を本尊とするため空也堂と呼ばれていますが、正しくは紫雲山極楽院光勝寺といい、天慶元年(九三八年)に空也が開創したと伝えられています。当初は三条櫛笥(現、今新在家西町)にあったため櫛笥道場とも市中道場ともいわれました。

応仁の乱によって焼亡し、寛永年間(1624-1644)に現在地(中京区蛸薬師通油小路西入)に移ったといわれています。

空也は、鉦を叩きながら念仏を唱え、全国を行脚して浄土教の庶民階層への広がりにつとめました。一方で、橋を架け、道路を造り、井戸を掘り、野にあって死骸にあえば火葬して荼毘にふすなど社会事業にも尽力しました。そのため、空也は市聖とか阿弥陀聖とか市上人とも称されましたが、この空也の民間布教活動は、一遍をはじめとするその後の布教僧に大きな影響を与えました。

「今昔物語集」(巻廿九)に、「其の寺に阿弥陀の聖と云ふことをして歩く法師ありけり、鹿の角を付たる杖を、尻には金えぶりにしたるを突きて、金鼓を叩きて万の所に阿弥陀仏を勧め歩きける」とあり、平安時代の空也の遊行の姿を伝えています。六波羅蜜寺に安置される空也像は、皮の衣をまとい、鹿角杖を持ち、首から提げた鉦を叩きつつ、阿弥陀仏の名号を唱えつつ行脚する姿であり、「今昔物語集」でいうところの空也

を活写しています。空也堂を本拠として遊行する僧たちは空也僧と呼ばれ、瓢箪を叩いて歩くところから、のちには「鉢たたき」とも称されるようになりました。

「雍州府志」(貞享元年(一六八四年)成立)に、「此の院内の老を上人と称し、魚肉を食わず、妻子を携えず、髪を剃り、衣を著す。其の余十八家の者は、髪を剃らず、妻子を携え、常に茶筌を製し市朝で売る」と記されており、空也堂には、一人の住持と、髪を剃らず、妻帯で、朝市で茶筌を売っていた十八軒の人々がいたことがわかります。彼ら十八家の人々は、厳冬の夜には竹の枝で瓢箪を叩き、声高に「無常の頌文」を唱えながら、洛外の墓所・葬場を巡って死者の供養もしていました。

毎年十一月十三日の空也忌(現在は第二日曜日)に、空也堂では勇躍念仏踊がおこなわれています。また、近年では六斎念仏も奉納されています。空也僧と呼ばれた人たちの末流を統括していた空也堂が、六斎念仏講中に免許を与えていたという歴史的経緯によるものです。

(源城政好)



空也堂

メモ●「空也堂」は、四条通堀川上ル東（中京区亀屋町）で、阪急電鉄「大宮駅」より徒歩10分、市バス「四条堀川」より徒歩5分

京都でいちばん人のにぎわう四条河原町の交差点から四条通を東に進むと、鴨川を渡ったあたりから八坂神社の朱い楼門がみえてきます。

八坂神社は明治以前は、祇園感神院ぎおんかんじいんあるいは祇園社という名でよばれ、平安時代には朝廷より奉幣ほうへいをうける二十二社の一つでした。創建の経緯は明らかではありませんが、延喜二十年（九二〇年）の「貞信公記」には祇園社の名前がみえ、また承平四年（九三四年）には社殿が建立されたと伝えられていて、十世紀前半に成立していたことは確かです。

八坂神社の名を有名にしたのは、十世紀後半頃から始まったと思われる祇園祭です。この祭りは、正確には祇園御霊会ぎおんみたまいといい、非業の死をとげた死者の霊をなぐさめる目的で始められたものでした。現在の山鉾の源流は長徳四年（九九八年）に無骨という芸能者が、大嘗会たいじやうかいの標ひょうに似た柱を引いたのが始めといわれ、後には洛中の町々が山鉾を作って祭に参加、現在の山鉾巡行へと発展していったのです。

祇園社が被差別民衆と関わりをもつようになるのは平安時代末期からで、牛馬や犬猫の死骸が祇園社境内に発生したとき、それを取り除く仕事を清水坂下にいた乞食せじきに頼むようになったことからでした。「穢れ」というのは人に害をなすと当時の人々

が考えたものの全体を意味する言葉ですが、人の死や誕生など不安定な状態も穢れの一つで、動物の死も穢れをもたらすと考えられていました。

御霊信仰が新たに起ったことに示されるように、平安時代の中末期は律令制国家が衰退するなかで社会が不安定となったことが、穢れ意識が昂進する背景としてありました。清水坂下は京都から清水寺への参詣路にあたり、この付近には早くから乞食が多く集まっていました。祇園社と結びついたのは、乞食のなかでも主だった人たちと考えられますが、彼らはこの仕事を得るなかで乞食の中でも特権的な集団となり、清水坂下だけでなく京都内外の乞食を支配するようになっていきました。

鎌倉時代に入って祇園社の領主権が強まると、彼らは祇園社の警察・軍事力の一部を担当するようになり、その力を強めていきました。この人々が、祇園祭の先頭を歩いて神輿みこしの巡路を清めていたことはよく知られており、頭に白い布を巻き、手に棒をもつ人の後に、武具をつけた人が続きました。穢れの清めと警固という、彼らの仕事が祭の場に集約されていたといえます。

（山本尚友）



八坂神社

メモ●「八坂神社」は、四条通東大路（東山区祇園町北側）で、阪急電鉄「河原町駅」より徒歩5分、市バス「祇園」下車すぐ

9 盲人たちの積塔会しやくとうえ

下京区

四条河原は、すでに歌舞伎など興行の地として登場していますが、それは主に河原の東岸、大和大路にかけての地でした。しかし西岸もまた、盲人たちが日時を定めて石を積む「積塔会」を行う地として、早くから知られていました。

正確な比率は知るすべもありませんが、土埃・綿埃が舞い、衛生観念の低かった近代以前の世界では、目を患い、視力のなのままに一生を送る人々の数は、現代よりはるかに多かったことは想像に難くありません。

視覚という五感のうちの一つを失った人々は、他の感覚が優れて発達し、神仏の世界との交信など、特別な能力を持つと考えられていました。また、彼らに対しては、今日いうところの弱者救済の手だても、社会の中に早くから備わってしまいました。

盲人の場合、鍼や按摩など、医療への関与を独占的に認められていたばかりではなく、音に対する鋭い感性を生かして、絃を用いる楽器の演奏に早くから能力を発揮していました。絃楽器自体が神仏との交信楽器であったことも、その背景にはあったに違いありません。とくに琵琶が、平家一族の滅びの物語と結びついた十四世紀以降は、それを語る盲人たちも、仁明天皇の皇子人康親王を祖神として、総検校以下の職制を持つ全国組織を作り、祖神にちなむ旧暦二月十六日の「積塔」や、旧六月十九日

の「涼みの塔」には、四条河原に参集して祭祀を執行しました。盲僧の組織を司る職屋敷は、室町時代後期には四条室町の函谷鉾町にありましたが、江戸時代には、仏光寺通り東洞院付近に遷り、清聚庵と称して、幕府から五百石を拝領して運営されてきました。

春の会式の積塔とは、河原の石を拾い積み上げる先祖供養の行事で、まず屋敷に集まった総検校以下の役職が、祖神の画像の前で平家を弾じたあと、四条河原に出て石を積み、香華を手向けるものでした。この時手向けの柄杓には、桜花が添えられました。六月の会式も同じく積塔でありましたが、河原には前日の十八日まで祇園会の納涼床（現在の床の前身ですが、河原に直接設置されました。）が出ており、それがたたまれた翌日の行事でした。

積塔会を行った場所は特定できませんが、清聚庵の場所から考えても、四条河原の西岸、四条大橋南側付近の地であったに違いありません。

(山路 興造)



當道職屋敷跡



四条大橋南側

✕モ●「石碑(上)」は、東洞院通仏光寺東(下京区仏光寺西町)洛央小学校前で、地下鉄「四条烏丸駅」より、徒歩10分
「河原(下)」は、四条大橋西岸南側(下京区齋藤町)で、阪急電鉄「河原町駅」より、徒歩2分

10 京都市学校歴史博物館

下京区

平成十年（一九九八年）の十一月十一日、京都市下京区の旧開智小学校を改修して、京都市学校歴史博物館がオープンしました。

京都市内の学校には、それぞれの学校を卒業して、芸術界で活躍した人々のすぐれた絵画・陶芸・彫刻・書などが数多く所蔵されています。その保存と活用をめざして、各学校の学校文化財の調査が本格的にはじまったのは、昭和六十年（一九八五年）のことでした。

その結果、明らかになったことは、貴重な美術工芸品ばかりでなく、江戸時代の寺子屋の教科書をはじめとするあまたの学校教育に関する資料が約八千点も存在するという事実でした。学校の統廃合が進むなかで、これを放置するわけにはありません。そこで平成七年（一九九五年）十月に、京都市学校歴史博物館設立のための基本構想策定委員会が発足し、その答申をうけて、市立の学校歴史博物館が具体化することになりました。

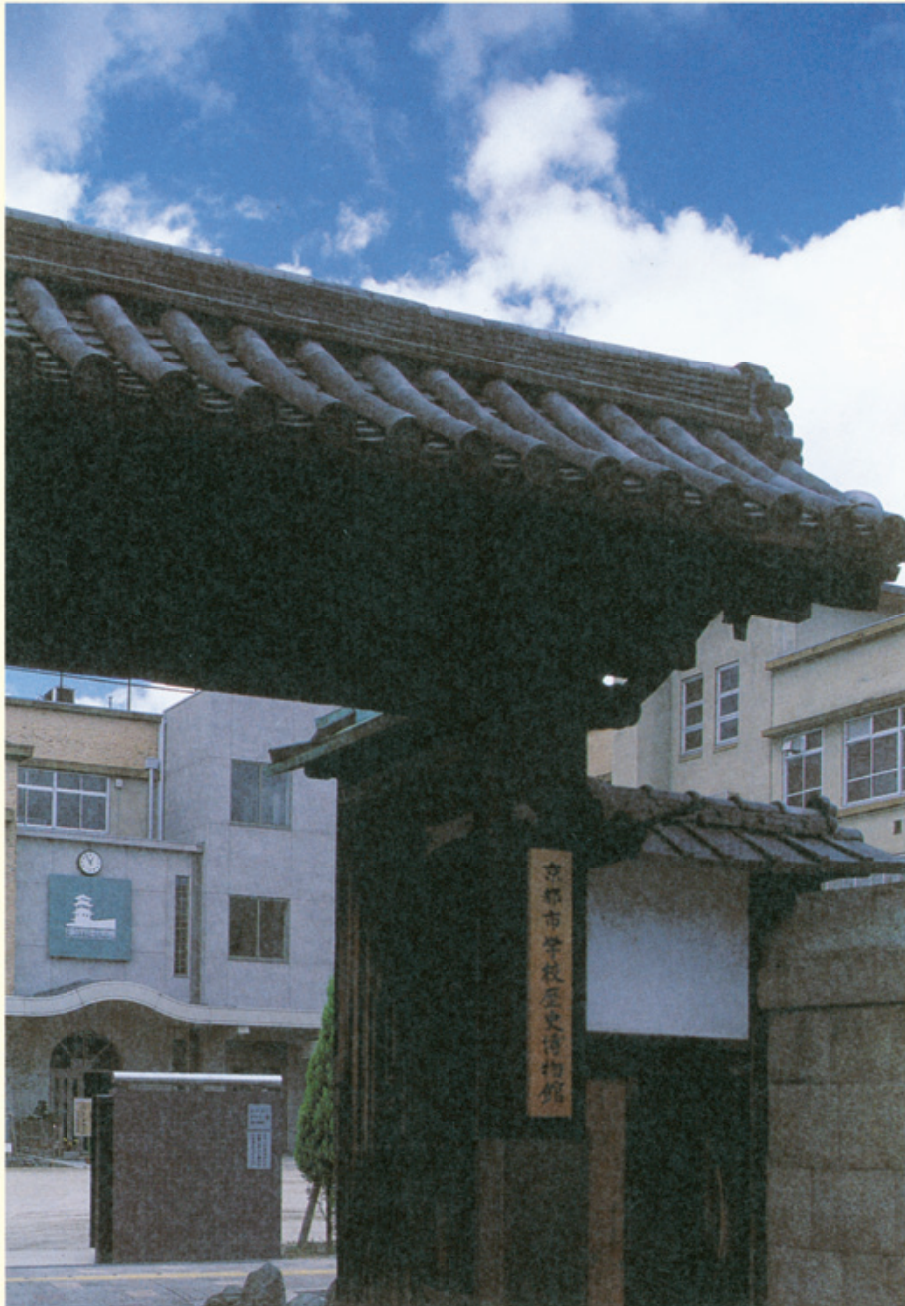
教育関係のこの種の博物館や資料館は、他都市にもありますが、そのほとんどは明治・大正期の学校建築の保存と活用のために設置されたものです。江戸時代以来の町衆の自治とその質問の伝統を受けついで、豊富な学校文化財そのものを内容とするのは、全国唯一といっても過言ではありません。

なぜ約八千点もの学校文化財が、各学校で所蔵されてきたの

でしょうか。それは明治以降の京都が大火にあわず、戦災の大きな被害をまぬがれたこともその理由のひとつになっています。それ以上に注目されるのは、京都の近代教育が江戸時代の町衆の学問と教育を継承して、事実上日本の首都ではなくなった京都の明日を「教育百年の計」によって充実させようとしたことです。

京都では、全国にさきがけて明治二年（一八六九年）に番組小学校（六十四校）が創設され、ついで中学校・女学校（女紅場）、さらに幼稚遊戯場（幼稚園）がつくられました。明治五年（一八七二年）五月に、京都の学校を視察した福沢諭吉が、その『京都学校記』に「余輩積年の宿志」が京都の学校に生きている感動を書きとどめているのも誇張ではありません。こうした学校開設をたつて建議したのは、篤志軒（私塾）の西谷淇水（良圃）らでした。たとえば、慶応三年（一八六七年）の建白には「それ学問の道というは難字古事を覚ゆる勤めにあらず、ただ人と生まれて人たる者の大道の義を求むるにあり」と明記されています。自治と自警の町会所を母体に具体化した番組小学校には、コミュニティースクールの面目が宿っていました。そして、それは京都における人権文化創造の場でもあります。

（上田 正昭）



京都市学校歴史博物館

メモ●「京都市学校歴史博物館」は、河原町通高辻西（下京区橘町）で、市バス「河原町高辻」より徒歩3分

11 東寺

南区

平安京遷都後に羅城門の東に建立された東寺は、嵯峨天皇から空海に勅賜され真言専修の道場とされました。東寺は教王護国寺（現在は正式名称）ともいうように王を教化し国を護るといふ鎮護国家の役割を担う寺院でしたが、平安時代の中頃には密教の根本道場という性格が強調され、鎌倉時代に至ると西院御影堂を中心とする弘法大師信仰で賑わうようになります。平安時代の後半には御願寺^{ごがんじ}建立や戦乱の影響で衰退していきまが、鎌倉時代に入って弘法大師に深く帰依する宣陽門院の東寺興隆事業で中世的な寺院に変貌を遂げるといわれます。

中世の東寺には散所法師^{さんじよほふし}と呼ばれる人々があり、掃除役を勤めていましたが、鎌倉時代の末頃には他の権門に所属して東寺の掃除役を勤めようとはしなくなりました。宣陽門院の東寺興隆事業をさらに進めた後宇多院は、掃除料として散所法師十五人を寄進しました。

さて散所とは御恩なく召仕われる人々のことで、奉仕をすることにより自身の保護を受け、さらには権門の威を借ることもありました。散所には二種類あって、課役^{かえき}を免除されて諸役を勤仕するものと、課役免除はなく保護を求めて奉仕をするものがあります。仮に前者を当職散所^{とうしきさんじよ}、後者を非職散所^{ひしきさんじよ}と呼んでいますが、後宇多院の寄進は東寺興隆事業が鎮護国家の寺院とし

ての復活が主な目的であることから、員数限定で東寺に課役免除の当職散所を認めたとということです。

南北朝時代の末に東寺は、当職散所に対して東門近辺に地子^{じし}路散所という地域集団を形成しますが、朝廷の権限の多くを吸収した室町幕府は、これに応じて南小路という在所を限定した課役免除を認めるようになります。

室町時代の東寺の当職散所は、散所定使^{さんじよじょうし}のもと老衆・若衆の組織をもち、東寺に掃除役をはじめ築地役・諸門警固役や普請等入夫役を勤仕しますが、築地構築の技術に優れていた彼らに、室町幕府はしばしば築地役を賦課するようになり、幕府の特別な用向きの節には賦課に依じざるをえなくなります。課役免除や地子免除は大きな特権ですが、一方でその特権が掃除散所として、職掌や地域の面から隷属を強制する側面があったことを見逃してはならないと思います。

（宇那木隆司）



五重の塔と東門

メモ●「東寺」は、九条通大宮（南区九条町）で、市バス「九条大宮」下車すぐ、
近鉄「東寺駅」より徒歩3分、JR「京都駅」より徒歩10分

12

広隆寺

右京区

京福電車太秦（うしまたい）の駅を降りると、正面に荘厳な広隆寺（ひろりゅうじ）の姿があります。山門横には国宝第一号とかかれた弥勒菩薩半伽思惟像（みろくぼさつはんかしゆい）の写真が飾られています。アルカイック・スマイルと呼ばれる柔らかな微笑みをうかべたこの弥勒菩薩像は、人々から最も愛されている仏像の一つです。

『日本書紀』によると、推古天皇十一年（六〇三年）に秦河勝（あまが）が聖徳太子からもらい受けた仏像をまつるために寺を造ったのが、広隆寺のはじまりであるとされています。ただし創建の頃の場所は現在地とは異なっていたようです。

秦氏は、五世紀後半に朝鮮半島東南部の新羅（しんら）から移住してきた渡来系氏族です。その最も特徴的な性格は、葛野大堰（かどのおおい）による嵯峨野開拓に代表される土木工事に長けたことですが（『人権ゆかりの地をたずねて』葛野大堰の頁参照）、その他にも養蚕（さん）・機織（はた）りに巧みであったという伝承をもち、大化改新以前の朝廷の蔵を管理する実務官としても活躍しています。殖産興業に卓越した能力をもつ秦氏は、大和朝廷の統一国家形成の進展に合わせて、六世紀に入ってから朝廷直轄領の屯倉（みやげ）の経営に関わる形で畿内から地方へと勢力をのびし、地方に住む渡来人を組織していった（彼らは「秦の民」「秦人」（はたひと））とよばれました。）と考えられています。

広隆寺のある葛野（かどの）（京都盆地西部地域）は、その秦氏の根拠地でした。寺の周辺の太秦という地名は、秦氏の長の別称です。また、広隆寺境内にある大酒神社（おほさけ）の神は古くは「大辟の神」、中世には「大裂明神」といわれ、土地を割いて治水灌漑（かんがい）を行った秦氏の事績をたたえる名と考えられます。平安京遷都も、背景には在地の秦氏の経済力や土木技術がありました。

広隆寺の弥勒菩薩半伽思惟像は、韓国の国立中央博物館にある金銅の弥勒菩薩像に瓜二つであることから、古代の朝鮮文化の伝播を示すものとされています。高い技術で産業を興した秦氏の事績と在地に生きた共生の姿とともに、古代の国家間における文化交流の一場面を知ることができます。

（菅澤庸子）



広隆寺

メモ●「広隆寺」は、三条通太秦（右京区太秦峰岡町）で、京都バス「太秦広隆寺前」、京福電鉄「太秦駅」下車すぐ、JR「太秦駅」より徒歩20分

編集によせて

今回、「人権ゆかりの地をたずねて」の京都市内編を刊行することになりました。これまでの5冊（計6冊）の「人権ゆかりの地・Ⅰ」、「Ⅱ」、「Ⅲ」と「乙訓・南山城編」、「丹波・丹後編」あわせてご関心をよせて下さることを願っております。

ところで、当「京都市内編」は伝統都市京都にふさわしく、古代から現代にいたる人権問題の諸分野について収録することができました。時代の長さと分野の広がり、まだまだ追及の余地を残しており、さすが「古都1200年」といわねばなりません。都の文物や資史料が残されていることが人権の歴史の重さを伝えていることにもつながり、当センターの役割は重要といわねばなりません。

ときあたかも2001年、「人権教育のための国連10年」の半途にあり、また国内では「人権教育及び人権啓発の推進に関する法律」施行のときにあたります。「本パンフレット」が、新しい前途にむけて啓発資料の一端としての役割を果たすことを期待しております。人権啓発の静かな伏流水の一滴にでもなればと願っております。

ご活用下さることを願いつつ「あとがき」を記しました。

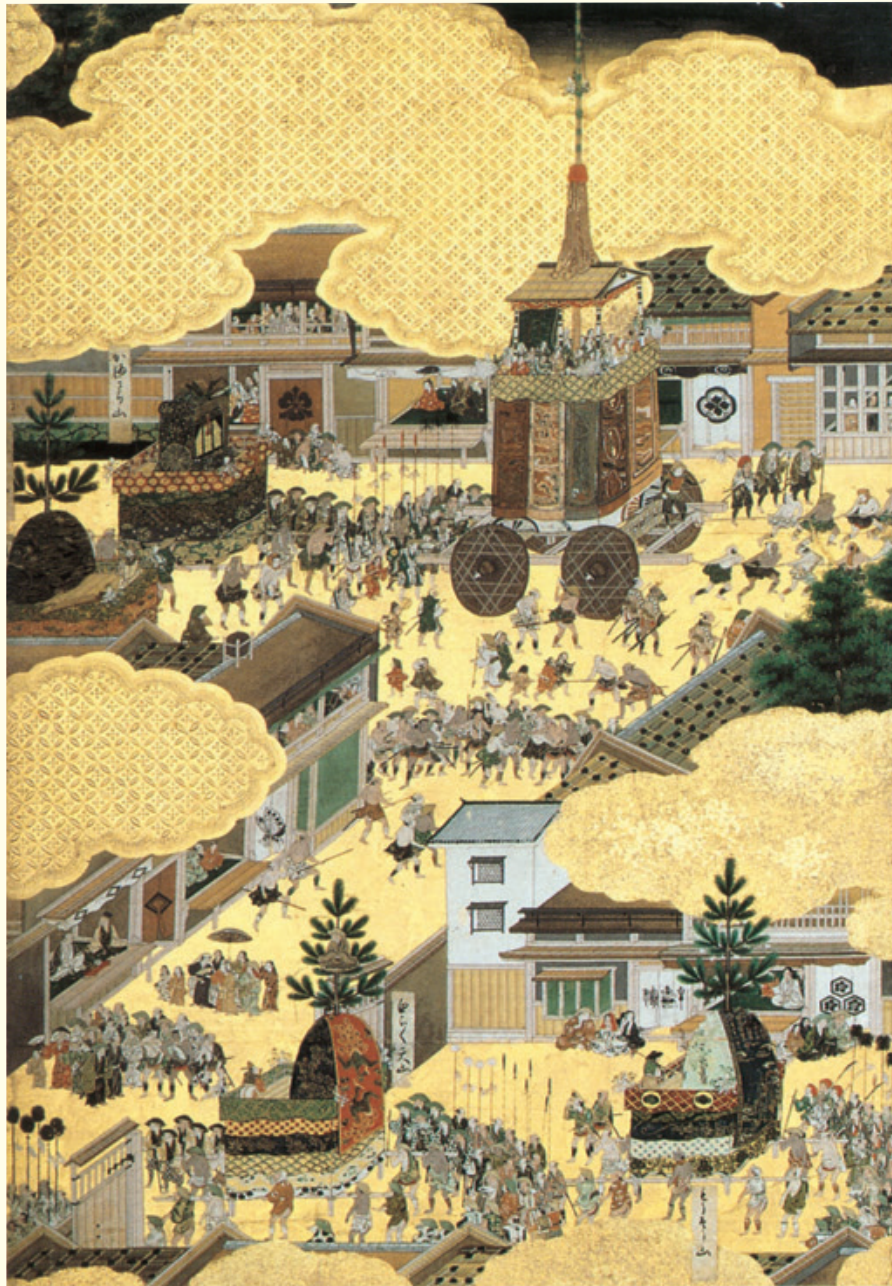
編集担当 秋定 嘉和
(財)世界人権問題研究センター
研究第2部長

この冊子をつくるに当たり、関係の方々に文献、資料の提供や写真撮影などについて、数々のご配慮をいただきました。厚くお礼申し上げます。

〈執筆者〉（掲載順）

薬師寺公夫	立命館大学教授・研究センター客員研究員
秋定 嘉和	池坊短期大学教授・研究センター研究第2部長
川嶋 将生	立命館大学教授・研究センター客員研究員
仲尾 宏	京都造形芸術大学教授・研究センター研究第3部長
福田 雅子	ジャーナリスト・研究センター研究第4部長
源城 政好	宇治市歴史資料館館長・研究センター嘱託研究員
山本 尚友	研究センター専任研究員
山路 興造	同志社女子大学講師・研究センター嘱託研究員
上田 正昭	京都大学名誉教授・研究センター理事長
宇那木隆司	姫路市教育委員会・研究センター嘱託研究員
菅澤 庸子	研究センター専任研究員

写真 曹智鉉



祇園祭礼図（京都国立博物館蔵）

六曲屏風一双、右隻のうちの二曲目

祇園祭礼の華である山鉾巡行のこの屏風制作時期は寛永年間の半ば



人権 ゆかりの地をたずねて 京都市内版

2001年3月発行
発行 京都人権啓発推進会議
事務局 京都府同和・人権啓発室
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
電話 075-414-4271
制作協力 財団法人 世界人権問題研究センター
電話 075-231-2600

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています。